

平成5年度

## カウンセラー研修を終えて

川崎市総合教育センター カウンセラー研修員

## カウンセラー研修を終えて

松本 映一<sup>1</sup>

### 1. はじめに

最近の中学校での生徒指導の様子は、非行を伴った生徒はあまり目立たなくなり、登校拒否をはじめとする不適応行動を持つ生徒が、少しずつ増えている。学校現場では、これらの不適応行動を持つ生徒に対する指導が十分に行き届いているとは思えない現状がある。例えば、校内に相談室や面接室があることを知らない子どもや親がいることや、知っている、そこが叱責や説諭の場所などと思っていること。学校が相談活動の場を持ち合わせていても、実際にはそれらが十分機能しているとは言えない現状がある。それは、現場で働く教師にとって日々の忙しさの中で十分に時間をかけて教育相談の研修を積み、それを理解する機会が少なく、また、「教育相談」とか「カウンセリング」という言葉を聞くと、「即効性がない」「聞くだけ」「甘やかし」などと思われている一面もあり、教育相談やカウンセリングの考え方が学校現場に定着していないせいでもあろう。

生徒指導担当教員として3年が経ち、この間、いろいろ研修会に参加し教育相談の講義や実習の機会を得てきたが、その場で話を聞いている時は納得しているものの、いざ学校に帰ってやってみようとするとうまくいかない。このことは、これらの講義や実習の中身が自分自身の中に溶け込んでいないことを物語っている。

このように感じている時に、1年間カウンセラー研修員として教育センターで研修する機会を与えられ、受理会議や事例会議、教育相談実習講座に参加し、実際の教育相談業務にも携わらせていただき、不登校状態を示す生徒の理解や援助のあり方などを、以前に比べて少し掘り下げて研修することができた。生徒理解や援助のあり方について研修したことを私なりにまとめてみたい。

### 1. 研修の中で学んだこと

この1年間、教育相談に関するいろいろな研修を行ったが、生徒理解や生徒指導に生かせる専門相談機関としてのセンターのシステムや考え方、カウンセリングの方法やカウンセラーの資質などについて気がついたこと、印象に残ったことなどを研修内容の中から述べてみたい。

#### 1. 受理会議・事例会議の中より

毎週1回行われる受理会議では、申し込まれたケースの一つ一つについて、親担当、子担当よりインテークでの報告をする。そこでの主訴の内容を見ると、障害児の就園、就学相談や検査、知能や学業、性格や行動、登校拒否の問題など教育全般にわたる。

会議の中では、受付での様子や表情、言葉遣いや話し方、服装などいろいろな角度からの報告がなされた。また、面接用紙に書き込まれた家族構成、家庭環境、性格、行動等生育歴に関するものなども併せて述べられていく。そして、それらに関して質問や意見が出されるなど、事実の把握を

<sup>1</sup> 川崎市立宮内中学校教諭（カウンセラー研修員）

大切に相談活動に入って行く。また、より適切なカウンセリングを行うために、精神科のドクターの助言を得ることもできる。これらの多くの情報をもとに一つ一つ分析を加え、来談者の問題解決の方針が立てられていく。特に、中学生の相談では登校拒否に関する主訴が圧倒的に多く、現在の学校教育の悩み的一端がうかがえ、多くの示唆を得ることができた。

毎月一回持たれる事例会議では、相談員の方々が関わった相談の事例を提供して、会議が進行していく。資料の内容は、相談ケースの初回面接から現在までの心の変化などの経過が丹念に記述、分析されている。研究協議では、多くの質問や意見が出され、その中で問題点などを焦点化し、スーパーバイザーの適切な助言も加わり、問題解決の方向性が定められていく。来談者に対する洞察力やいろいろな情報を綿密に整理分析する姿には驚かされた。

#### ◆ 「親担当」・「子担当」の考え方

センターのカウンセリングのシステムである親担当・子担当に分けての面接は、学校現場でのシステムとは違う。学校の場合は、呼出し面接の形が多く、教師は親・子の双方を相手に三者の中でお互いが何を話したのかを知り合い、問題解決を図ろうとする。センターでの面接は、来所して来た人の思いを重視するので、相談員が指示や方向性を出すことはない。そこには、言う人と聴く人があり、センターの立場は聴く人である。すなわち、指導と相談の違いがある。学校での呼出し面接では、親や子は教師との間で利害関係を意識することが多く、それだけ心の問題に入っていくづらい。センターのシステムであれば、来談者（親・子）は安心して心を開いて相談活動を続けて行くことができる。このようなセンターのシステムを、そのまま学校に取り入れて相談活動を行うことは難しいが、相談の内容によっては利用できるのではないだろうか。

#### ◆ ドクターの存在について

面談をして行く途中で、来談者の希望に応じて精神科のドクターの診察を受け、医学の専門的な立場から適切な治療や助言を受けられるこのシステムは、相談活動をより円滑に進めることができることはもとより、問題解決への多様な試みができる。学校現場では精神科医に診断してもらいたいケースが時々あるが、父母の消極的な態度もあって実施できないことが多い。センターのシステムは、来談者が安心して受診できるメリットがある。

## 2. 教育相談講座の中より

23回の講座を受講したが、ここでは単にカウンセラーとしての技術の向上ということよりも、これから携わる実際の相談業務の心構えを学習した。

### カウンセラーテスト

- ・カウンセラーの資質として①人の話を安心して聞ける②人に対して柔らかく、明るく前向きで接しられる人③相手にどれだけ関心をもっているか……等があげられる。
- ・カウンセラーの態度として①リレーション作り②相手の気持ちを受け入れる（受容）③相手の気持ちを聴く（傾聴）④相手のためにという気持ち……等が大切。

### 箱庭療法

1メートル四方ほどの木箱の中に砂が敷きつめてあり、そこに玩具、動物や草木の模型を使い、自分のイメージの世界を作りあげる。クライアントの深層心理の表現を共有することができる。

## ミニカウンセリング

受講者同士でカウンセラー、クライアントの立場に立って、5分間ほどのカウンセリングを行い、会話の内容を逐語録にして、録音テープを聞きながら、受講者同士で意見の交換をしたが、面接の中では気付かなかった無意味な繰り返しや指示を出してしまう等、カウンセリングの難しさを初めて体験した。

### ◆ 「聴く」ことの大切さ

カウンセリング演習の中では、相談者の話をよく「聴く」ことの大切さを学んだ。学校現場にいるわれわれ教師は、生徒と接する時にどうしても「指導する」とか「教える」という意識が先に立ち、話し過ぎたり、生徒の言いたいことや考えていることを先取りしてしまい指示を出し過ぎている面が多くあることは、考え直さなければならない。日常の教育活動の中でも、生徒の話をよく聴き、理解してやるのが、自分の力で考え判断できるような生徒を育成していくことになり、生徒自身も存在感を持つことになる。

### 3. 実際の教育相談業務に携わって

11月中旬、初めて実際の相談面接に携わったが、4月より研修してきたカウンセラーの立場に立った相談活動ができるかどうかたいへん緊張した。また、50分の間に自然な形でどれだけの情報が得られるのだろうか等、多くの不安があった。そのような中で面接がはじまった。

以下は私が担当した相談ケースについての経過を含めた報告である。

#### 事例 小6 A子さん

小学校6年の2学期に父親の転勤に伴って、転居してきた。しかし、転居先の学校には2カ月ほど通っただけで登校できなくなってしまった。

#### 〔面接1回目〕

両親と一緒に来所し、待合室のソファーに座り漫画本を読んでいた。服装はセーターにジーンズという軽装であった。私が「こんにちは」と声をかけると、はっきりとした口調で「こんにちは」とあいさつしてくれた。その後、両親と離れて地下の作業能力検査室に行き卓球を始めた。卓球は両親と一緒に温泉に行った時に少しやった程度だと言っていたが、そのわりにはラケットを上手に扱うことができた。20分ほど卓球をし、「疲れた」と言って椅子に座って休憩をとった。この休憩の間に、Aさんは学校に行けなくなったことを次のように語ってくれた。「誰かにいじめられたわけでもなく、クラスの友達も親切にしてくれた。なぜ学校に行けないのかわからない。」そして、「休みはじめてから友達が家に迎えに来てくれたり、学習ノートなどを届けてくれたが、そのことがだんだんと重荷になってきた。今は友達が嫌なのでほとんど外出しない。家でファミコンをしたり、テレビを見たりして過ごしているので運動不足になってしまった。」などたいへんよく話してくれた。その話し方はハキハキとして賢そうな感じを受けたが、色白な顔の表情からは何か神経質そうな雰囲気もあった。その日が最初の面談であったが、自分の気持ちをしっかり語るなどたいへんよくしゃべると印象をもった。このことは、両親や祖母など家族との関わりの中でのAさんの気持ちの表れであると思った。すなわち、家族に心配や迷惑をかけていることが苦痛なのだろう。

#### 〔面接2回目〕

卓球をしながら話してくれた。「このままだと中学校は、今の学校の友達と同じ所に行かなければならなくなってしまうので、来年は私立中学校を受験することを家族で話し合った。合格をめざして勉強をはじめ、塾にも行く。」と希望に満ちた会話ができ、私は、それを応援することをA子さんに伝えた。この日の面接は、たいへんよい雰囲気の中で行うことができ、次回への期待の高まりを感じた。

〔面接3回目〕

新年最初のこの面接では、「冬休みの塾の講習はたいへんで、今の自分にはできない。受験は諦め、家の中で以前の生活にもどってしまった。」また、「このことで、お父さんが怒ってしまい、家の中がまずい雰囲気になってしまった。」など、卓球の合間に暗く沈んだ表情で語ってくれた。この問題が、A子さんの心の負担にならなければよいが、と思った。

〔面接4回目〕

いつものように卓球をすることからはじまったが、A子さんの方から「もう少し卓球が上手になりたい」と言ってきたので、サービスの出し方やラケットの振り方などを時間をかけて教えた。なかなか思いどおりにならないが、熱心に取り組んだ。一球一球打っていくうちに額に汗がにじんできたので、椅子に座って休憩をとった。この時に「いつも家にいるので運動不足になっている。これくらいでもたいへん疲れる。」「運動不足を解消するために、卓球場に通ってみたい。」など、汗をふきながら楽しそうに話してくれた。前回の問題がA子さんの心のどように残っているのか心配であったが、「もうだいじょうぶ」と言っていた。そんなA子さんを見ていたのもしく思った。

〔面接5回目〕

この日は卓球をする前に家でのできごとを話してくれた。「このあいだ雪が降った時に、お父さんが車を出そうとしてバックしたらガードレールにぶつけてしまった。だから、今日は、電車で来たが、時間がかかった。」と笑いながら話してくれた。ゲーム形式の卓球をしたが、サーブの出し方やボールを打つタイミングがとても良くなってきた。15分ほどして休憩をとったが、このとき机の上にあったパチンコ台を見て、「おもしろそう」と言って玉を打ちはじめた。釘の位置や間隔を丹念に見るなど、パチンコに興味を持った様子であった。そういったことから、次回はパチンコ台を作ろうということになった。

〔面接6回目〕

パチンコ台の絵を描くために、家から映画のパンフレットを持ってきた。そして、「少し難しいが、クーという架空の動物を描いてみる。」と言って、鉛筆で下絵を描き出した。台の材質がベニヤなので細かいところが描きづらそうであったが、面接時間内には完成させることができた。最後に「学校に行っているころ、絵を描くことはあまり得意ではなかった。」と言っていたが、出来上がった作品は細かいところまでいいに描かれていた。次回は色塗りをすることを約束して面接を終えた。そして、待合室に帰るまでの廊下を歩きながら、自分から両親のことを「最近、お父さんは何も言わないが、お母さんは何かイライラしているようだ。」と話した。A子さんの口から久しぶりに母親のことが語られた。A子さんと母親との間に、どのようなトラブルがあったのだろうか。

## 〔面接7回目〕

面接時間の30分ほど前から待合室のソファーに座っていた。歩きながらそのことを聞いてみたら「電車の乗換とバスの連絡がうまくいき、センターに早く着き過ぎてしまった。」と答えてくれた。部屋に入るとすぐにパチンコ台を取り出し、家から持ってきた絵の具からパチンコ台の下絵を塗る色を選んだ。そして、台に描かれている空の色を出すのにたいへん苦労していた。思った色が出せないでいる時、「このパチンコ台の空の色も私の学校と同じように中途半端になってしまうのかな。」と一人でつぶやいた。何かイライラしている感じが感じられ少し気になった。その後、予定していたところを全部塗り終え、5分ほど卓球をして待合室にもどり、次の面接予定時間を告げた。面接予定時間がいつもより4時間早いことが分かると、「早くて嫌だな」と不満そうな表情を見せながら帰った。面接が終わった後、この日のA子さんの様子から少しずつ私に心を開いてきているのかなということが感じとれた。

週に一度センターに来ることを楽しみに、今も面接が続けられているが、4月には中学校進学という差し迫った問題が、A子さんや両親の心の中に重くのしかかっているであろう。

### ◆面接における人間関係作り

担当ケースを持って感じたことは、カウンセリング初期の人間関係をどのようにして作り出すのかという点であった。このケースでは、来談者が子どもであったので、運動的、作業的なものを取り入れる中から来談者が心を開き、自然に話す内容にそって、その裏に流れる気持ちを聴かせていただくことであった。また、それらの中から行動の一つ一つを観察し、その子の性格や特徴をつかみ取り理解することであった。しかし、子どもの場合は同じことをしていると、マンネリ化してきて相談が惰性で流れていってしまうような気がするのは、未熟な私のあせりなのだろうか。

### ◆カウンセリングマインドを生かした指導

専門相談機関としてセンターで行われている教育相談を、そのまま学校の教育相談に取り入れることは難しい。それは、実際に行われている学校での教育相談が援助するというよりは、問題の解決を指導するということが中心になっているからである。しかし、カウンセリングマインドの特性を生かした指導や生徒理解は十分考えられる。つまり、「カウンセリングマインドを生かした指導」をすることになる。では、カウンセリングマインドとはどのようなことをいうのであろうか。東京学芸大学の江川教授は、①相手への関心・無条件の受容②相手に対する信頼感③相手の人格を尊重する態度④相手に対する共感的態度⑤相手に対する分析的理解⑥他者に対する励まし・援助等、6つをあげている。これらのカウンセリングマインドが、学校の教育活動にどう関わっているか、授業の中での教師と生徒の姿から考えてみた。教師の質問に対し、生徒が自信なげに答えているときに、温かく聴いてやる（受容の適用）・それが正解であれば、それを繰り返してみる（繰り返しの適用）・言葉足らずのものには、生徒の気持ちを察していってみる（明確化の適用）など、このような教師の対応で、生徒との間には共感的理解が得られるであろう。このようにカウンセリングマインドを生かした指導は、授業をはじめ学級活動、クラブ、部活動など、学校におけるすべての教育活動に生かすことができる。

## 2. 今後の自分自身の生徒理解について

学校現場での今までの生徒理解や指導に関わる姿勢を振り返ると、生徒に対して相談・助言的な立場に立った内側からの指導よりも、管理、訓育的立場に立った外側からの指導を優先することが多かった。言い換えると、生徒が自分自身で問題解決ができるように援助してやるというよりは、説得したり叱責したりして、生徒を変えようとする関わり方が強かった。このような指導では、問題行動がなかなか改善されない場合も多かった。カウンセラー研修員としてセンターへ通う中で、今までの生徒指導に対する理解の仕方や関わり方を見直す必要を感じた。それは、問題行動を示した生徒を受容し、その行動に至ってしまった本人の気持ちをしっかり受け止め、理解していくなかで、指導や援助をしていき内省を促すことである。また、学校における生徒指導の中心目標は、問題生徒の治療や非行の防止だけというような消極的なものでなく、すべての生徒の豊かな人格の育成をめざしていく積極的、開発的な援助のあり方である。それは、カウンセラーの基本である相手を受容し、共感的に理解するという態度を教師が持ち、生徒や保護者と接することである。ここで研修した内容を学校にもどって、他の先生方に伝え、共有していきたいと思う。

## おわりに

1年間の研修を通して、生徒指導や教育相談を新たな視点から見直すことができたような気がする。また、実際の教育相談業務に携わり、人を受容し、共感する態度を持つことから始まるカウンセリングの難しさや厳しさ、さらに奥の深さを体験できたことは、今後の教育活動を進めていく上で、たいへん意味のあることであった。

最後に、このような研修の機会を与えて下さったことに深く感謝し、ご指導、ご助言下さった第4研究室の諸先生方をはじめセンターの諸先生方に厚くお礼申し上げます。

### ・参考文献

|      |                 |      |       |
|------|-----------------|------|-------|
| 国分康孝 | 「カウンセラーのための6章」  | 誠信書房 | 1991年 |
| 武田建  | 「カウンセラー入門」      | 誠信書房 | 1984年 |
| 米田正信 | 「カウンセリングプロセス実習」 | 誠信書房 | 1988年 |
| 氏原寛  | 「カウンセリングの実践」    | 誠信書房 | 1992年 |
|      | 「教育と医学 480」     | 慶應通信 | 1993年 |

### ・指導助言者

川崎市総合教育センター 第4研究室 指導主事…………… 松井 恭子